

Title	研究対象／問題領域としての昭和一〇年代文学
Author(s)	松本, 和也
Citation	阪大近代文学研究. 2018, 16, p. 20-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68147
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

研究対象／問題領域としての昭和一〇年代文学

松本 和也

一、研究対象としての昭和一〇年代文学

近年、一九四〇年代論や総力戦体制論が隆盛をみているが、それは端的に戦中・戦後をまたぐ連続性への注目によるのだろう。同時に、昭和一〇年代という枠組みによってみえにくくなっていたものをみる、ということでもあるだろう。ただし、昭和一〇年代という枠組みも、今なお、注目すべきだと思われる。というのも、昭和一〇年代という枠組みによってこそ、満洲事変以来のアジアとの関係、拡張していく大東亜共栄圏のゆくえ等々、つまりは「昭和」という暦のものとで展開された、戦争の結末が不分明な現在進行形の歴史について、よりよく考えられるはずなのだから。文学（研究）についても同様と考え、論者はここのところ、集中的・継続的に、昭和一〇年代文学を研究対象としてきた。

さて、こうした近年の問題意識を振り返りつつ相対化する契機として、共同研究会「方法論の再検討——一九三〇〜四〇年代の日本文学研究」（於大阪大学豊中キャンパス、平二

九・九・一五）に参加し、斎藤理生氏（大阪大学）、平浩一氏（国士館大学）とともに報告をする機会を得た。論者の報告「文学研究としての昭和一〇年代——ねらいと方法」における問題関心は、次に引く日比野士朗「戦争と日本文学」（加藤武雄ほか『国民文学の構想』聖紀書房、昭一七）に集約的に示されたものであった。

時局便乗主義といふ言葉の流行したのもこの頃（昭和一五年一〇月）のことである。（略）一部の作家が、自己の保存のために、時局に便乗するやうな行動を採るといふやうなことが指摘されたのである。かういふ傾向は、いはゆる戦争文学の精神と、内容的には峻烈な対立があった。さうして、この二つの傾向の中間に、多くの純粹の作家の悩みがあつたと言つても過言ではない。実際、作家たちは自分の能力に対して、懐疑的にならずにはゐられなかつた。彼の足場は、次から次へと崩れて行つた。単に自分の能力を疑つたばかりでなく、高見氏のいはゆる、文学非力説といふやうな率直な告白まで現れるやう

になった。これに対して、尾崎士郎氏は文学の大精神を説いて得意の気焔を上げる。その一方、岸田氏を翼賛会文化部長の椅子に送った知性派は、その理想主義をかかげて、知識人たちの絶大な支持を得る。文壇は混沌としてゐた。

この一節には、昭和一〇年代的と称すべき問題系が集約されているように思われる。第一に、書き手である日比野士朗についてである。日比野は八高中退後、河北新報勤務中の昭和一二年九月に応召、呉淞クリーク敵前渡河戦で左腕を負傷して帰還を命ぜられる。翌一三年三月、召集解除、復職する。その後、「呉淞クリーク」(『中央公論』昭一四・二)によって一躍帰還作家として名をあげる。戦争ものを期待されながらも、私小説を書きつぎ、昭和一七年からは大政翼賛会文化部副部長をつとめた。兵士としての戦場体験、戦争文学／私小説の執筆、文学団体への参加といった日比野のキャリア自体が、すでに昭和一〇年代的だが、それは別のいい方をすれば、他の文学者・作品・トピックを包含した文学場の諸徴表が日比野に集約的に刻まれているということでもある。第二に、論文を収載した書籍自体もまた、日本文芸中央会で議論されてきた国民文学論がやや遅れてまとめられたものであり、ここにも新体制運動と連動した国民文学論、そこへの文学団体の関与が明らかである。そして第三に、言表内容としての、時局との関わりの中での文学者たちの葛藤(素材派芸術派論

争)、高見順／尾崎士郎(文学非力説)に代表される太平洋戦争開戦前後の文学者の姿勢、さらには大政翼賛会文化部(岸田國士)など文学団体をめぐる文学者たちの態度や反応等々も、この時期の特徴的な局面といえるはずだ。

こうしたことごとについて、しかし、これまでの昭和一〇年代に関する文学研究は、うまく問題化し得てこなかったように思われる。もちろん、ここでごく一部をあげれば、平野謙『昭和文学史』(筑摩書房、昭三八)、曾根博義『昭和文学史Ⅱ戦前・戦中の文学——昭和8年から敗戦まで』(『昭和文学全集別巻』小学館、平二)、川西政明『昭和文学史(上巻・中巻・下巻)』(講談社、平一三)など、それぞれに特徴的な文学史があり、共同研究の成果である、四回にわたる雑誌特集「戦争下の文学・芸術——太平洋戦争下を中心に——(一)〜(四)」(『文学』昭三六・五、八、一二、昭三七・二)には今なお参照すべき重要な論考・回想が並ぶ。さらに、小田切進・篠崎圭介「昭和十年代文学研究文献総覧」(『国文学』昭四〇・六)に掲げられた研究の蓄積もある。それでも、研究対象の重要性に比して、昭和一〇年代文学研究は手薄ではなかったか。そもそも、少なからぬ文学者によって、アジア・太平洋戦争期に重なる激動の一〇年間に展開された実にさまざまな文学活動を、戦後からの評価軸によって単純化してきたきらいはなかったか。つまり、単純な量の問題としてではなく、質の問題も含めて、昭和一〇年代の文学研究には、

再検討の余地があるはずなのだ。

二、『現代日本小説大系』「昭和十年代」の文学

文学全集の類いにおいて、「昭和十年代」がそれと明示されたのは、日本近代文学研究会編『現代日本小説大系（全六五巻）』（河出書房、昭二四〇二七）においてである。第四十六巻（第六十巻の一五巻ぶん）には、「昭和十年代」の作品が集成され、そのトータルコンセプトについては、中島健蔵「解説」（『現代日本小説大系 第四十六巻』河出書房、昭二四）に意を尽くして語られている。まずは、中島の議論を追っておこう。

この時代を《特別な時期》と捉える中島は、片岡良一によって《「民族主義時代」または「反動文学の時代」》という対案が出されたものの、《少くとも研究会の八人の同人にとつては、体験上、「昭和十年代」という呼び名がびつたり来た》ことを以て、「昭和十年代」という呼称を選択したのだという。さらに、中島は《後世、この呼び名が他の人々によつても採用されるかどうかは知らないが、この時期に生き、この時期に文学にたずさわっていた人間にとつては、忘れがたく、また無数の問題にみちた「昭和十年代」だった》という言明を付しながら、時期区分について、第一期は《一九三七年（昭和十二年）七月七日、蘆溝橋事件発生まで》、《大戦突入の日（昭和十六年一月八日）》までを昭和十年代の第二

期とし、以後敗戦までを第三期》と三分節している。つまりは、昭和一〇年代に日本が経験していった戦争に即した区分ではあるのだが、その実、戦争およびそれがもたらした言論空間の変容こそが要所だったはずである。

第二期について中島は、《蘆溝橋事件以来、民族主義の重圧が、作家全体におおいかぶさつて来た》、《積極的に民族主義を支持するか否かが、作家に対する一般的な問題となつて来た》、《しかもその重圧は、第二次世界大戦が終了するまで、少しも重さを減ずることなく、刻一刻徹底的になつて来た》と記述して、こうした状況を《一種の踏絵》と評している。より具体的な文学者の振る舞いについて中島は、次のように述べている。

作家、評論家の間には、しばしば消極的な抵抗が起こるみられた。一方、強力な抗議は、そのまま弾圧の危険を招くこととなり、弾圧は、そのまま拘禁へ、あるいは少くとも執筆に対する干渉に通じ、實際的に生活をおびやかされることになった。未曾有の悪時代である。積極的に民族主義に賛同しない作家は、直接に弾圧を受けないまでも、ひどい不自由を体験しなければならなかった。多くの作家は、逆手に出て、民族主義の仮面をかぶり、その仮面の下で、生きる道を発見しようと試みた。不自由を忍び、すれすれの線をくぐりながら仕事をして行つた作家、民族主義の仮面の下で、積極的な仕事を少しで

ものばして行こうと試みた作家、この両方向は、一見相反するように見えたが、仮面は仮面であつて、真相はいまだに明かでない。従軍作家が必ずしも軍国主義者ではなかつたと同様、民族主義、国策協力派と見えた作家が、心から右転回を決心したか否か、これは全く疑問である。さらに、第三期に関して、《それまでは、軍国主義に対する抵抗の可能性が、ほんの少しではあるが、なお存在していた》ことにふれた上で、《しかし、開戦と同時に、一さいの可能性が失われた》という中島は、《暗黒時代につづく空白時代》Ⅱ《戦争文学の時代》が来たという。その上で中島は、《昭和十年代は、大まかに云えば、民族主義の時代であり、戦争文学の時代であり、反動の時代である》としながら、《しかし、その歴史は、それほど単純ではない》ことに注意を喚起し、次のように述べている。

いずれにしても、昭和十年代は、まだ未解決のままの多くの問題を含んでいるのである。わたくしは、日本の歴史の中で、この時期ほど、裏表のある時代はなかつたと信じている。著作家は、ほとんど例外なく、含みのある文章を書くことを覚えた。頭から割り切れたようなことを書いている人間は、きわめて少数である。

本稿でも、研究対象としての昭和一〇年代文学に注目するゆえんである。しかも当該研究領域においては、事実の確認・整理や、《仮面》が多用されたこの時期の文学的言説を

どのように理解するのか、という基礎的な作業すら残されたままなのだ。

こうした時期ではあつても／それゆえに、昭和一〇年代には多くの文学的言説が産出されていった。アジア・太平洋戦争末期には、紙の配給や新聞・雑誌の統廃合を経てメディアの整理が進み、それゆえ残されたメディアにおいても文学的言説を掲載すべき物理的スペースの狭隘化が著しかった。ただし、昭和一〇年代中葉には空前の出版ブームがあつたこともまた事実である。この間の事情に関わつて、中野重治は「解説」『現代日本小説大系 第五十五巻』河出書房、昭二五）において、次のように述べている。

この時期（昭和一〇年代）は、非常に沢山の小説が書かれ、世間にひろく読まれ、小説の題材も社会的にひろげられた時期ではあつたが、同時に、一つの不幸な時期であつたということである。それは、同じことをくり返すようになるが、世間にひろく読まれたということのなかに、帝国主義的な政治権力が、人が小説を読むということが要因としてあつたからである。小説の題材が社会的にひろげられたということの中に、帝国主義的な政治権力が、この権力の自ら欲する方向と方面とで、今まで取りあげられることのなかつた材料を作家たちに強制的にか奨励的にか押しつけたことが要因としてあつたからである。

そこでしかしもう一ついえば、われわれ作家たちが、その原因はさまざまであつたにしろ、これにたいする反発・反抗・破壊を文学世界のなかに組織することができず、後退・転向・屈伏によつて、多かれ少かれ強制を一般的に受け入れる形となつたことが、この不幸の最大の要因の一つであつた。

つまり昭和一〇年代には、書くことを禁じる権力ばかりでなく、書かせる権力もまた作動していたことを中野は指摘しているのだが、書いた場合、それをどう読むかという問題は不可避である。中島健蔵「戦争・弾圧・抵抗」〔『文藝』昭二七・六〕から引いておく。

書く以上、書きたくないことまで書かなければ沈黙を強いられる。それでも書き続けるに当つて、やはりいろいろのニュアンスがあつた。書きたくないことは最小限度にとどめておく。あるいは、気がつかないように他のところで打ち消しておく。一方、思い切つて、書きたくないことと心中してしまつて、その代り、本来ならば書かせられないようなことを盛りこんでしまう。

同じく中島による、『岩波講座日本文学史 第十三巻近代戦前・戦中の文学』（岩波書店、昭三四）から、同様の問題にふれた箇所を参照しておこう。

言論、出版の自由がほとんど全く失われ、はげしい統制の下に、行政処分による発行禁止、さらに進んでは、検

挙、起訴、処罰の危険が、たえず身近にあつたわけである。検閲は一カ所だけではすまなかつた。内務省警保局、内閣情報局、憲兵隊、その他あらゆる権力機構や民間の右翼団体までが、検閲していたようなものである。密告、告発もたえずおこなわれていた。

その上で中島は、こうした現実世界の中で、（当時）何が・いかに書かれ、（当時／後年）それはどう読まれるべきなのか——こうした難問について、次のように述べている。

このような悪条件の中で、かろうじて発表された作品、あるいは、そのような網の目をくぐりぬけて問題なく発表された作品が、一般的にどのような性格のものであつたか。要するに、思いどおりに書き切ることが、作家の表現能力とは別の問題として、不可能になつていたのである。どのような悪条件の下でも、作家は表現すべきものを表現しなければならない、という考えが、すでに当時から存在した。悪条件に対する抵抗よりは、条件を甘受してその中で書きぬく、という、いかにもりっぱそうに聞えるが、結果として、そうはいかなかつたのである。

もとより、いつ・どこにおいても、文学者があらゆる条件から解放されて、自由に書けることなどなかつただろう。

しかし、そうした原理的な前提とは別に、昭和一〇年代を書いて過ごした文学者にかかつていた諸条件の負荷は、それと

して正しく考えるべきだろう。そのことを軽視／過大評価すると、昭和一〇年代の文学(者)を歴史的に理解することは難しくなってしまう。次節では、そのことに関わる評価の問題を検討していきたい。

三、昭和一〇年代文学の評価

まず、昭和一〇年前後／昭和一〇年代の文学(史)について、古典の一つと目されている平野謙の記述を参照しておく。「昭和十年代の文学」(『毎日ライブラリー 日本』の文学)毎日新聞社、昭二六)から、昭和一〇年代を概括した一節を次に引く。

昭和十年代の歴史は、これを一口にいえば、戦争とフアシズムの時代であり、無条件降伏というかつてない国家的破滅をたどった荒廃と転落の時代である。文学もまたそのような戦時体制下の統制に屈服して、一種の非文学的時代を現前せざるを得なかった。むろん、そこに摩擦と抵抗がなかったわけではない。「略」しかし、そこには抵抗の中心となるべきものに欠けていた。その中心になるべき左翼出身の作家たちは、宮本百合子や中野重治のように絶えず投獄・執筆禁止をもって脅やかされるか、林房雄や浅野晃のように百パーセントの日本主義者として一種の挑発者にもなりかねぬ状態でしか、その文学的生活を許されぬありさまであった。多くの左翼作家

は一勢に国策順応の姿勢をとって、いわゆる肩書文学——生産文学・大陸文学・農民文学などの制作にいらんだ。かえって沈黙と韜晦^{とうかい}が最高の芸術的抵抗にほかならなかった。

おそらくこれは、今なお、昭和一〇年代文学(史)についてスタンダードな評価だと思われ、また、一面妥当でもあるだろう。もちろん、平野史観自体への異議申し立て¹⁾はこれまでにも展開されてきたが、これにかわるほどの遡及力もちえていない。ただし、本稿で注目したいのは、ここで《非文学的時代／芸術的抵抗》が連携するようにして語られているレトリックについてである。本節の結論を先取りして言えば、昭和一〇年代文学に関する酷評／抵抗という両極の評価とは、その実、コインの表裏に他ならないのだ。

先走った議論を戻すべく、荒正人編『昭和文学十二講』(改造社、昭二五)に掲載された昭和一〇年代に関する二つの論文を参照してみよう。

中村真一郎は「芸術的抵抗派」で、知識人の抵抗について次のように論じていく。

一般的に云えば、戦争中、社会的行動として、有効なだけ戦争に抵抗した人はなかった。知識人を三つに分ければ、第一に、積極的に戦争を指導した人々。第二に、便乗した人々。第三に逃避した人々。と此の三種類だけで、第四の、積極的に抵抗の運動を行ったと云う部類の

人々は無に近い。

それでもなお中村は、《芸術的抵抗派》と云う、必ずしも適當でない名称に一括される人々の、戦争に対する態度は、要するに、現実に対する不在の態度であり、平和の回復を待つ態度である》と、右の四分類の他に、《芸術的抵抗派》を積極的に見出そうとしていく⁽²⁾。また、次のようにして、中島同様にこの時期特有の問題にもふれていく。

学者は、原稿料によつて生活するものであるから、その文筆活動は、専ら個人の名によつてなされる訳であり、表面的には少くとも、発表された文章は、その当人の意見であると思はれる。しかし、現在になつて、その当時の文章だけを読む人間にとつては、それが筆者の真意であるか、偽装であるか、を見分けることは甚だ困難である。

例えば、或る学者の戦争中の著作が、明らかに、戦争協力を謳つていても、それを読む人の大部分は、その著者の従来からの思想が、反帝国主義、反戦主義であることを知つており、その著作の戦争協力的な言説の部分は、飛ばしてしまつて、専らそこに提出されている事実のみを読み、その事実の集積の背後に、著者がかなり明らかにまに匿してゐる結論を読み取る、と云うようなことが行われた。その場合、その書物は、著者と読者との關係に於いて、誤解はなく、唯、出版上の便宜に軍国主義が仮

装されていた、と云うにとどまる。

ここでの中村は、芸術的抵抗を試みた知識人が存在したという前提で右の文章を書いているようにみえる。あるいは、直接交流のあつた知識人にそのような人物がいたのかもしれないが、極端にいえば、中村自身が《芸術的抵抗派》を發掘しているようにもみえる。いずれにしても、きわめてハイコンテクストな言語コミュニケーションには違ひない。

もう一本、これと対比して参照したいのが、小松伸六「戦争文学の展望」である。《政治と文学》という点からみれば、私にあたえられた課題である十年代の戦争文学は、もつとも悪しき意味で、政治と文学が直結した、というよりは、文学が政治の奴隷になつた時代の、奴隷文学にほかならぬ》とまで酷評する小松は、さらに次のように述べていく。

近代的自我の未成熟の当然のみすばらしい帰結が、戦争の悲劇だつたのであり、戦争によつて文学者たちは文学者のよつてたつ自我をすら放棄してしまつたわけであり、そうして従つてそこから生れた昭和十年代の戦争文学は、文学の名に値しないゼロの文学だつたとも云えようと思ふ。うし、戦争文学は今日及び明日の我々の課題であらう。

今日からみれば、近代的自我の偏重や視野の狭隘さなど、小松論を批判することはたやすいが、しかし、昭和一〇年代文学（研究）が軽視されてきた原因として、右のような認識が今なおあることは疑い得ない。戦争ゆえに自我が抑圧され、

しかしそのような状況下でも戦争文学を書かなければならなかったため、そこにもう文学はなかったという逆説。

先に述べたように、中村真一郎と小松伸六の、同じ時期の異なる局面を主題化した二つの議論は思いの外よく噛みあっている。昭和一〇年代文学をそれとして文字通り読めば《ゼロの文学》となり、複雑な含みを読みとれば《芸術的抵抗（派）》となるのではないか。だとすれば、昭和一〇年代文学に対して、表面的には両極の評価を示す二つの議論は、その実、台座を共有しており、いずれも主観的な文学史評価として表裏一体なのだ。

もつとも、この両者をより現実的な水準で総合した文学史記述もある。小田切秀雄は『日本現代史大系 文学史』（東洋経済新報社、昭三六）で、次のように書いている。

太平洋戦争開始以前の日本文学は全体として空前の荒廃に達し、この荒廃をおし進める役を買って出た者、それに下うけとして追従した者、荒廃を發展ととりちがえた者、心ならずも調子をあわせて自己の独自性を解体させてしまった者、等々が支配的な流れとなったが、それだけが日本の文学者のすべてではなかったのである。

また、一つの作品の内部でも、主題や説明的部分では軍国主義的でありながら、個々の部分やかくされたモチーフにおいては、けっして軍国主義的でないところの作者の心のかくされた渴きや訴えやがこめられている——と

いう例もすくなくなかった。作家たちは、毅然とした反戦闘争に進むことはできなかったが、あるところまでは抵抗して屈伏ないし屈折し、または屈伏した場所から微妙な抵抗を行うことを試みた。それは、きらびやかな作品を生みだしはしなかったが、社会的、精神的重圧にたえてかろうじて造型された暗い苦渋な美と、傷つきゆがめられた心の最低限の人間の・文学的な要求の痛切さをもつて、戦争下になお根絶されなかった日本文学の命脈を示すものとなり、この時期の経験は戦後の文学の発展の一つの歴史的地盤とはなりえていたのである。

こうした指摘や中島健蔵・中村真一郎の議論を想起してみれば、昭和一〇年代文学の研究に際しては、先入観や主観に囚われない、歴史的なコンテクストをふまえた検討が要請されることは明らかだろう。もつとも、ここでも昭和一〇年代の文学全体についての《空前の荒廃》という低評価を前提に、戦後文学的な価値観、つまりは論者の理想の文学観に即して、そこへつながる文学性の萌芽を積極的に発掘しようという姿勢は明らかである。

その後、一つのメルクマールとして、昭和四〇年に昭和一〇年代文学の再検討が集中的に展開された。布野栄一は「学会ハイライト」欄に「最近における昭和十年代の文学研究の展望」（『国文学』昭四三・一一）と題した一文を草し、《文学における問題意識を中心》とした分類によって《戦争文

学」「日本浪漫派の文学」「転向文学」「鼎立の時代」として研究レビューを展開していた。ただし、当時のジャーナリズムにおいては、より端的に昭和一〇年代文学が問題化されていた。その端緒となったのは、奥野健男「現代文学の基軸——虚数の有効性——」（『文学界』昭四〇・三）の《今日のもつとも真摯で気鋭の文学者たちが、ぶちあたり、苦闘している問題は、昭和十年頃、当時の気鋭な文学者たちが直面した問題とある意味で似ている》という気づきである。別言すれば、《今日の状況はマルキシズムの思想と、政治の優位性、文学の直接有効性の呪縛から自由になりながら、時代に対し烈しい危険意識と不安をおぼえ、現代という未知の状況に直面し、たちずくんだ昭和十年前後の文学状況と似ているようにぼくには思える》という奥野流アナロジーであり、それはアナロジー以上でも以下でもない。それに対するさまざまな反応については、針生一郎が「昭和の『文芸復興』と現代文学」「十年代」再検討の前提は何か」（『週刊読書人』昭四〇・四・五）で次のようにまとめている。

これらの意見をならべてみただけでも、じつにさまざまな昭和十年代があるのにおどろかされる。一言でいえば、この時期はマルクス主義運動の解体と転向現象を誘因として、文学界全体が再編されるとともに、昭和文学の全体にわたる矛盾が露呈された時期であった。プロレタリア文学とモダニズム文学の接近と交錯がみられたた

けではない。「純文学」は概念として定立されるとともに、大衆文学、風俗小説の浸潤にさらされ、知識人は大衆から孤立し、自意識の混乱になやむ一方、都市や農村のよんだ現実、伝統的な生活意識にむかつて下降しなければならなかった。作家、批評家の昭和十年代をめぐるイメージが、バラバラな上に不安定なのは、危機感と解放感がまじりあい、思想と方法が分裂した当時の状況の二重性のなかで、かれらの体験そのものが流動的で、みきわめがたい様相をとっていたからである。

こうした多様な昭和一〇年代文学像を裏打ちするように、小田切秀雄は「『十年代』文学再検討への疑問 今日の文学状況との対比をめぐって」（『週刊読書人』昭四〇・五・三一）において《わたしは、昭和一〇年代との対比というや一方を十分な根拠あるものだと思うことができない》と真つ向から反対していたし、イデオロギー対立という側面もぬぐえない。前後して文芸誌が組んだ「巻末特集 昭和十年代作家」《群像》昭四〇・三二もまた、焦点が定まっていない。目次を列記しておけば、〈座談会 河上徹太郎・舟橋聖一・平野謙「昭和十年代の文学」、丹羽文雄「昭和十年代の作家」、中島健蔵「昭和十年代の社会的苦悩」、中村真一郎「昭和十年代作家の試み」、さらに「昭和十年代作家所属同人雑誌一覧」が付されている。もちろん、一面、昭和一〇年代文学の多面性に応じた構成ではあるが、反面、昭和一〇年代文

学をどのように捉えるべきなのかについて安定した評価軸がないままに、特徴的な局面・執筆者によって組まれた構成にもみえる。

同様の傾向は、竹松良明「昭和10年代の文学研究」（上田博・木村一信・中川成美編『日本近代文学を学ぶ人のために』世界思想社、平九）にもみとれる。《昭和10年代という文学史上の時代区分には、たとえば昭和初年代に比較して西暦年号には変換しにくいものが多分に含まれていそう》だと指摘する竹松は、この時期を次のように概説していく。

昭和十年代中葉から末期までの文学の現実密着の位相はあらためて確認するまでもなく、それは文学の機能が十分に事実の記録と報道にのみ限定的に追い込まれていく過程である。事実それ自体のもつ圧倒的な意味の重さのために、文学はそれに追従する他はなく、事実の後ろから踟躕して進む以外に道がないというこの不自由な姿態は、戦争の季節の深まりと共にごく自然なものとなる。（略）そこでは文学は戦地報道としてのルポルタージュと、一方では戦意高揚のモチーフに即して機能するフィクションと、この二つの機能の中間で居心地悪そうに揺れているのが一般である。絶対的な事実の大きさに寄り添い、その事実からかりそめにも遊離しようとする気配すらなく、事実の上をひたすら匍匐前進するだけの文学の姿に、昭和十年代の袋小路とも言うべき現実密

着の最終ステージを見ることができると。

大局としては妥当に思われる《事実》重視という昭和一〇年代後半の文学に関する貴重な指摘を含む右の一節ではあるが、戦争という出来事の影響力による《文学の姿》を、本来もちえていた文学の潜勢力を想定しながら否定的に評価している点は気にかかる。しかし、たとえばモダニズムによる多彩な表現にしろ、文学が現実世界の出来事と無縁に展開されたことなどなかったはずで、その意味で、竹松も理想の文学観から、昭和一〇年代文学の貧しさを《袋小路》と酷評していることは明らかである。

もつとも、いつ・どこからみても客観性が保証される評価軸などあるわけもなく、それを想像上で仮構すべきだとも思わない（少なくとも、それは研究の領分ではない）。そうではなく、本論二節で中島健蔵の議論に即して確認してきたように、現実世界には、それぞれの時代に固有の歴史的な諸条件があったはずで、そのことを意識し、そうした視座を何かしらの方法によってなるべく高い精度で仮構していく作業の蓄積の上になつて文学現象を捉えていくことが、こと昭和一〇年代文学の研究においては必須ではないのか。これまでの昭和一〇年代文学評価・研究史自体が、そのことを指し示しているのではないか。

四、問題領域としての昭和一〇年代文学

以上の議論をふまえつつ、ならば今日（以降）において、どのように昭和一〇年代文学を問題化していくべきなのか。さいごに、少しく手がかりを示しておきたい。何より、改めて自覚しておきたいのが、昭和一〇年代文学という問題領域の広大さである。

それは第一には、昭和一〇年代文学の形成に関わった文学者の多さである。再び奥野健男の議論を参照するならば、「昭和十年代文学とは何か？——現代文学の基軸——」（『文学界』昭四〇・七）で奥野は、次のように『昭和十年代作家』についてふれている。

ぼくのいうところの昭和十年代作家とは、「無頼派」を中心とする作家たちにほかならない。しかし文壇や読者一般の通念は、それと違うようだ。昭和十年代文学を代表する作家は丹羽文雄、舟橋聖一、石川達三、井上友一郎、石坂洋次郎、武田麟太郎、島木健作、徳永直、火野葦平らであり、あるいは尾崎一雄、外村繁、上林暁らであるようだ。時代に超然たる私小説作家を除けば、丹羽文雄、石川達三に代表される彼ら、別群の昭和十年代作家は、ぼくの考える「無頼派」中心の昭和十年代作家とある対蹠的なひとつの共通した性格を持つている。文壇の勢力から言えば、丹羽らが昭和十年代作家の主流、正統派であり、「無頼派」は異端的な破滅派であるのかも知れぬ。この二つの昭和十年代作家の性格は、昭和十

年代という時代の表と裏、ネガティブとポジティブとを、象徴しているようだ。

奥野は自身の考えと『文壇や読者一般の通念』とが『表と裏』だと嘆いてみせるが、今日からみれば、奥野が考えていた太宰治、高見順、石川淳、坂口安吾、伊藤整郎の方が研究もされ、読者も多いだろう。とはいえ、昭和一〇年代文学の形成には双方の文学者が関わっていたのであり、中村地平、小田巖夫など、もれた名前を数えあげればきりが無い。また、昭和一〇年代文学とは『昭和十年代作家』によってのみ形作られたわけではなく、少し上の世代では横光利一、川端康成、岸田國士、尾崎士郎、さらに上ならば島崎藤村、武者小路実篤、またジャンルを異にするなら吉川英治や獅子文六など、重要な役割を担った文学者はまだまだあがるはずだ。さらにいえば、奥野の想定からは女性文学者ももれている。

こうしたことは第二のポイントである、昭和一〇年代文学の地理的な広がりにも関わっていく。特集「昭和十年代の文学」に寄せられた、亀井秀雄「他民族体験と文学非力説」（『日本近代文学』昭四五・五）から、このポイントに関わる一節を引いておく。

昭和十年代の——もちろんこの文学史上の時代区分を前提としてのことであるが——特徴の一つとして、わが国の文学者の他民族との接触体験が圧倒的に拡大した事実があげられるだろう。火野葦平や日比野士朗のような

一兵士としての体験もあれば、大岡昇平のように、俘虜としての接触の仕方もあった。八木義徳や多田裕計のように、いわゆる外地の民間会社の社員としての接触もあったし、武田泰淳や堀田善衛のような上海生活の経験もあった。石川達三、丹羽文雄のような従軍ペン部隊としての体験もあれば、島木健作のように大陸開拓に積極的な関心をもって訪れた文学者、伊藤整のように大陸開拓文芸懇話会員として満支を旅しつつ、父の戦った日露戦争の山河を眺めてきた文学者もいた。小林秀雄のように、芥川賞を火野葦平にとどけがてら、ほとんど純粹な旅行者として大陸を見てきた文学者もいる。そして太平洋戦争の直前には、マレー方面、ビルマ方面、ジャワ・ボルネオ方面、比島方面、海軍関係と分れて、多くの徴用作家が動員された。実に多くの文学者が実に多くの土地を踏み、他民族と接し、何らかの形で見聞記録を残している。だが、その体験の全体が何をもたらしたのかは、必ずしも総体として整理されてはいない。

周知のように、右に指摘された南方徴用に関しては、近年飛躍的に資料整備を中心に研究が進んできた。それでも、地理的な広大さ、関わった文学者の多さもあって、歴史的なコンテキストに十分な目配りをした上で研究を進めていくことは、重要だが困難な道のりでもある。逆に、その他の領域については、上海研究が盛んな他は、研究対象とされる機会自

体がきわめて少ない。それでもなお、昭和一〇年代文学を問題領域と捉えて研究を進めていく上では、こうした広大さをふまえて、何かしらの工夫を講じていく必要がある。

総じて、昭和一〇年代文学という問題領域の広大さ——複雑な多面性を包括的に捉えようとする研究は、方法・実践ともいまだ緒についたばかりである。しかし、取り組むべき課題は、五里霧中ということはなく、それとして山積されている。そうであれば、昭和一〇年代文学の研究は、その基盤となる文学場の具体的な構成要素をおさえた上で、多彩で複雑な文学活動・現象を捉えながら、虫瞰／鳥瞰を複眼的に兼ね備えた同時代の視座を構築しながら進めていく必要がある。その際、当時の文学者たちが置かれていた状況を歴史的に想像していくことこそが、昭和一〇年代文学を研究する際の賭金といえるだろう。

注

(1) 平浩一『「文芸復興」の系譜学 志賀直哉から太宰治へ』(笠間書院、平二七) 他参照。

(2) 昭和一〇年代文学研究に関して、抵抗に関する量的な多さは特筆に値する。主なものだけあげても、佐々木基一「抵抗の様相——荷風と重治——」『文学』昭二四・七、荒正人「戦時下の〈芸術的抵抗派〉」『国文学』昭四〇・六、荻久保泰幸「抵抗の文学について」『解釈と鑑賞』昭五八・八) とつづき、

『講座昭和文学史 第三卷抑圧と解放』（有精堂、昭六三）には、鷺只雄「芸術的な抵抗」と海老井英次「抵抗としての沈黙——永井荷風『断腸亭日乗』の世界——」の二論文が掲載されるに至る。個別の議論を精査する必要があるが、権錫永「アジア太平洋戦争期における意味をめぐる闘争（一）——序説——」（『北海道大学文学研究科紀要』平二二）の指摘通り、≪「芸術的」抵抗≫という用語は、多分に戦争期のある現象を美化したものであって多くの矛盾を孕んでおり、それ故にその用語をめぐる論議が行われ、批判が出されてきたにも関わらず、人々の中で依然として魅力を失っていない」のだろう。

付記 本稿は、共同研究会「方法論の再検討——一九三〇〜四〇年代の日本文学研究」（於大阪大学豊中キャンパス、平二九・九・一五）における報告「文学研究としての昭和一〇年代——ねらいと方法」をベースに、前後して考えたこととあわせてまとめたものです。当日ご参加のみなさまに、この場を借りて御礼申し上げます。なお、本稿はJSES科研費 15K02943の助成を受けました。

（まつもとかつや／神奈川大学教授）